

# 日系アメリカ文学の発祥

— ユタ日報を中心に —

The Origin of Japanese American Literature  
— From Yuta Nippou —

山本茂美

Shigemi YAMAMOTO

## はじめに

日系文学を研究する中で、大多数の作品の中に、日系一世の苦勞話が多く取り入れられている。しかし、日系アメリカ人の歴史を研究していく時、日系一世の口から、自らの体験を語ることがほとんどないことが明らかになっている。それは、強制収容所に入れられた経験が、一世の心に重くのしかかり「自分の非」を責め続けた結果が大きいと考えられている。

それでは、どうやって二世、更には三世の人たちが、一世の体験を自分たちの作品に取り入れることが出来たのだろうか。一つには、1988年の市民的自由法の制定で、一世に「非」が無かったことが証明されたからだと考えられる。このことについては、今までの研究で明らかにしている。しかし、それだけではなく、必ず何か資料を利用しているだろうと推測をした。

この中心的資料であると考えたのが、日系人の中で、出版された日系新聞の記事である。修士論文を書く際「トパーズタイムズ」というトパーズ強制収容所で発刊された新聞の復刻版に注目し、当時の状況を知る手段として利用したが、今回はその折に目にした、日系

人達の短歌や俳句、更には小説に注目し、日系新聞の中のその内容が、どれほど後の日系人の小説などの文芸作品に影響を与えているかを考察しようと考えた。

手元には、『トパーズタイムズ』と、『ユタ日報』の復刻版があるが、今回は特に、『ユタ日報』の復刻版を中心に研究を進めることにする。これは、『ユタ日報』が当時、日系アメリカ人の文芸作品の発表の場として、多くの作品が投稿されたからである。<sup>1)</sup>そして、『ユタ日報』復刻版の7冊の中で、今回は後半の部分を中心に研究を進めていこうと考えている。

## 1. 『ユタ日報』について

『ユタ日報』の創設者、寺澤畔夫は、1881年3月11日長野県伊那郡山吹村に、父興太郎、母佐野の長男として生まれた。父は村長を長く勤める地元の有力者だったが、1903年に破産をして、畔夫の人生が大きく変わるようになった。長男である彼は、家の財産を整理して、郷里を離れ、渡米することになった。

彼は、1905年ロス・アンジェルズやフレスノで、農業労働者として働いた後、「人夫供

給業』を始めた。さらに、彼は1909年ユタ州ソルトレーク市に移り、そこで新たな仕事を始めたようである。こうして、ソルトレーク市で積極的に活動する中で、仏教徒のための新聞を発刊して欲しいという声を聞く事になる。

米国に永住することを決めた畔夫は、これらの声に応えるべく、『ユタ日報』を発刊することを決意した。こうして、日系人の仏教徒のための新聞が登場したのである。

さて、『ユタ日報』を語る時、必ず登場するのが、寺澤国子の存在である。寺澤畔夫が米国に永住することを決めたのは40歳になった時であった。そこで、考えたのは結婚することであった。彼は、日本に一時帰国し、花嫁探しをした。そこで出会ったのが村松国(後の国子)であった。

国子は長野県伊那郡飯田町に1896年7月8日に生まれた。彼女は高等女学校を卒業した後、共立女子職業専門学校被服科に進んだ。上京する際、「花嫁道具はいらないから、東京で勉強させて欲しい。」と両親に頼んだと言う。卒業後、故郷に戻り、母校の高等女学校で裁縫の教師をしていた時、先輩に畔夫との縁談が舞い込んだ。しかし、遠いアメリカへ渡米する時にためらった先輩を見て、「なんなら私が変わりに行きましょうか。」とって結婚を決めたと言う。

結婚後、二人には二人の娘が生まれ、畔夫は、新聞の販売や、油田開発事業への投資など忙しい生活を続けていた。その疲れのためか、1939年4月23日に、風をこじらせ急性肺炎になり、翌日急死するのである。

先に述べたように『ユタ日報』について、必ず国子の名前が挙がっていたのは、この畔夫の急死の後、女手一つで、『ユタ日報』を発行し続けたからである。当時、日系社会では夫が死亡したら、葬儀の折集まった香典を

持って帰国するのが通例であったが、国子はまわりからの強い要望に答え、夫の愛する『ユタ日報』を守り続けて一生終えたのである。そして、女手一つで発行されたことが、第二次世界大戦勃発直後、他の全ての日本語新聞の発行が禁止されたにもかかわらず、発行を許された理由であったと言う。

このような事情のため日本語新聞を求めるアメリカの各地の日系人からの便りが届き、その声に応えようと、国子は日々頑張っていたと言う。こうして発行され続けた新聞紙上に、数々の文芸作品が投稿され、作品の交流の場になっていたと言う。先にも述べたように、『ユタ日報』の復刻版は、

第1巻 1941年1月1日～1941年9月19日

第2巻 1941年9月22日～1942年8月7日

第3巻 1942年8月10日～1943年4月14日

第4巻 1943年4月16日～1943年12月15日

第5巻 1943年12月17日～1944年8月18日

第6巻 1944年8月21日～1945年4月23日

第7巻 1945年4月25日～1945年12月28日

から構成されている。このうち、第1巻から3巻の10月までの記事については、他の論文の中で研究を試みた。そこで、今回は第3巻の後半からの作品に注目して研究を続けていきたい。

## 2. 第3巻1942年10日～1943年4月14日の作品について

まず、この時期の米国内の日系人の状況について考えてみたい。1942年秋までにアメリカ市民と少数の学生が勉学の為に収容所を出たと言う記録が残されている。また、砂糖大根の収穫のため、約一万人が出所を許可されたと言う。

12月の終わりには陸軍省とWRAは、日系人に忠誠審査を実施して、合衆国に忠誠なも

のと、そうでないものを区別し、忠誠を誓う二世を兵役に付かせたいと考えた。当初は約5000人の二世が徴兵制によって陸軍の兵役に付いたと言う事実がある。しかし、全米的には、日系人に対する不信が募り、42年3月には、二世の兵役を停止した。

二世は、国に対する忠誠を示す場所を失い全米日系市民協会は、11月に懲役を再開する決議をする。陸軍省は、これを受けて、忠誠心を示す二世だけで、戦闘部隊を編成することになった。これを224部隊と呼んでいる。この折に、収容所では、17歳以上に忠誠を問うことになり、後に、強制収容所を出所させる判断基準としたのである。

この時の日系一世の複雑な思いは、その後の多くの日系文学作品の中で表現されている。収容された後で、米国に絶望したものは、「ノー」と答え、なんとしてでも収容所を出たいものは「イエス」と答えた。「イエス」と答えることで、戦場に向かうことをためらった二世の男子は、「ノー」と答えた。これらの二世男子はその後、「ノーノーボーイ」と呼ばれ、日系人社会の中でも、冷たい仕打ちにあうことになった。このような「ノーノーボーイ」の心の傷を表現したのが、ジョン・オカダの『ノーノーボーイ』という作品である。

以上の時代背景で、新聞を読み進めていきたい。

1942年11月4日

公務に追われがちな日々を過すうちに諸君からの句稿は机上にしばらく渦高くなって来た。東に西にまた南に北に、散り散りになった歌友の手紙や作品を手にとるときながら諸君の面影を眼の前に見るやうで懐しさはまたひとしおである。1つの芸術の導きあうえに

しの深さを私は今まさに体験しているのだ。たくさんの手紙に返事を書かねばならない。焦燥にかられながらも、今しばらくの猶予をいただかねばなるまい。ハートマウンテンの心嶺短い歌会結成も遠からずしてその役目を果たす。目下リクリエーションの当局との交渉の任に当って居られる原信太郎にお頼みしてその許可を願っている。

北米短歌会の名称は、私が数年前『北米短歌』という月刊誌刊行を思いついた時に考えた名前であって奇しき運命の元に今専念することになったのを思うと、まさに無量である。このハートマウンテンセンターには、我が有力な歌友、服部尚宏、山下すずらん、能勢昇の諸君をはじめとして、二世女流作家も居られる。今こそお互いにとって歌道精進絶好のチャンスである。何人かを問わずに米同胞にして作家研究を志す士は続々その作を寄せられたい。<sup>2)</sup> (3巻 56)

この記事から、当時の日系人社会の中で、ますます文芸に対する活動がさかんになっていた事がわかる

1942年11月6日

移り行く人に幸あれ開き晴れよ

友立ちてバラック訪へば鉢トマト

サンタアニアは逢ふて別れていく人ばかり

コロラドに移る支度や虫の声 (3巻 162)

先に述べたように、様々な形で日系人が新しいスタートを切ることになった。この時期の人々の気持ちを反映した作品が多く見られる。人々は自分たちの不安や悲しみなどをはっきりした言葉に出すことは無い。こうした行間に心情を読み取らせることは、まだ日本人の文芸である。

1942年11月13日の「無言の哲学」には、次のように書かれている。

踏れても  
根強くしのべ  
粗風は吹けど  
春を待つ草花を

世は海の如く  
人生の公開を試みる  
朝夕の帰りなれば  
君が語りし  
救ひの哲学を今にぞ悟らむ

ああバラックの窓側を見れば、心は揺らぐ  
弱きこの身にも  
安かれ希望を抱く（3巻 174）

ここでも、自分の気持ちを表すことなく、沈黙を守ることの美学が語られている。これは、日本で育った日本人の精神である。ここでも、いかに一世が米国に馴染めなかったかということ、更に、アメリカ人として生きている二世と精神的な隔たりがあったということが感じられる。

しかし、次のように、一步踏み込んだ作品が11月27日に掲載されている。

同胞らとらはれ人に等しけれ  
忘れまじき大和魂かも

田郎  
捕はれの身にも等しき同胞よ  
雄々しく生きむ姿をみるまで（3巻 198）

さらに1942年12月9日の記事の中に大変興味深いものがある。これは森百太郎による散

文詩である。

「20年後の或る対話劇的一幕」

「お父様、どうしてお兄様の赤ちゃんの時の写真があってお姉さまとあたしの赤ちゃんの時の写真がないの？」

「それはね、お父さんがおまえ達を産んで育てた頃の話をしなきゃならない。最初兄さんの時は、お父さんも貧乏ながら写真機があって初子のごとで珍しくてパチパチ何枚でも撮れたんだよ。だが、お姉さんが3ヶ月目にお父さんは新聞記者を辞めて元の教師生活にかえて…。」

「お前の時は深刻な追憶談となる訳だよ。ええと、そのとき、日本と米国とが戦争したんだ。そこでわし達米同胞はほとんど全部収容所というものに入れられて保護を受けたんだ。…つまり保護監禁と言うやつさ。時には刃物類、写真機、ピストルは申すまでも無く、日本語の書類や日本精神を表すの文物から玩具、望遠鏡、ラジオの短波機なんか所有禁止されたもので、全く、いや当時を眺め返す望遠鏡が存在するものならお前達に当時の同胞の苦難を参考のために見せたいくらいだわい。そんなしだいであって、20年後の泰平の今日の人々には想像もつくまい。おまえの赤ん坊姿が後世への記念として残っていないと言うお前の問題に対するわしの此れが答案だよ。」…

殊に収容所奉仕労働に出る数が比較的少なかった婦人は、急にお裁縫、編み物、いけばな、英語、増加、ひどい例だが、2世というジャンルは日本語が流暢になり、無愛嬌者も人に日常のあいさつをするようになる絶好な機会が来たんだ。」…（3巻 218）

この文が書かれているのは、自らが収容所に入れられている時期である。その時期に架

空の会話をすることによって、客観的に自分たちの置かれた立場を表現している。さらに、収容所にいる間に、時間が出来たことで、改めて日本文化が盛んになり、2世にも日本文化を伝えるチャンスが出来たということは、興味深い情報である。

1943年2月26日の作品の中に224部隊に関するものが見られる。

我が子らも 出征つならんきざしかも 戦区  
広めしラジオの叫び（3巻 346）

この頃になると兵隊志願に対する記事も毎日のように見られるようになる。さらに、1943年4月9日 飯野たか子の作品にはこのようなものがある。

わが子らをわれは捧げむ日米の国と国とのく  
さびとなして（3巻 418）

こうして224部隊に入っていく子供達に対する気持ちも少しずつ作品にあらわれるようになっていく

### 3. 第4巻 1943年4月16日～1943年12月15日の作品について

日米戦争の激しさが増すこの時期には『ユタ日報』の記事に、アメリカ側だけではなく、日本での報道も掲載されていることに注目したい。表面的には、日本側の報道は強気ではあるが、現状は日本にとってかなり不利なものになっていた。

一方、米国の日本人達にも、動きがあった。1942年の夏には日系の大学生が東部の一流大学に受け入れられ、約4300人の2世が収容所を後にした。また、WRAは、飲食店、工場、

農場等で日本人を雇ってくれる場所を探し、収容所から出て定住させる動きを見せた。日系人も西海岸に戻れば再び排斥されることもあり、他の各地に散らばっていった。

さて、この時期に一番問題になったのが、先に述べたように忠誠登録である。この中の質問で問題となったのが次の2問である。

第27問 あなたはアメリカの軍隊でどこでも命じられた場所で先頭任務に喜んでつきますか。

第28問 あなたはアメリカに無条件で忠誠を誓い、外国或いは国内の勢力によるいかなる攻撃からもアメリカを忠実に守りますか。また、いかなる形でも、日本国天皇、あるいは他の外国の政府、権力、組織に対する忠誠あるいは服従を誓って否認しますか。

この項目は、アメリカ市民になることを許されなかった日系1世にとって答えにくいものであった。もし、天皇を否定すると、1世はどこの国にも属さないことになってしまう。そこで「ノー」と答え、「不誠実者」として他の転住所に移されたのだ。またそこで、「イエス」と答えた2世の男子は、442部隊に入り、特に戦火の激しい地域に送られたという。日系人ばかりの442部隊が日本と戦う時、姿形の全く同じものの戦いとなり、数々の悲劇が生まれたのである。

1943年5月31日のユタ川柳の中には、忠誠に関する作品が見られる。

忠誠を皮膚の色から疑はれ（4巻 86）

このように、忠誠と言う言葉が表現された作品は、この日までほとんど見られない。日系人達にとって、口に出せない重い問題であることが分かる。更に、この頃になると、文

芸作品の投稿の書面が極端に少なくなる。そして排日事件などが多数報道されている。

さて、そんな中、1943年8月9日には、「北米教壇」の欄に2世の部が登場する。

我が部隊休むひと時道端の  
 大きキヤクタス迎ぎともしむ  
 上官の号令分かねば前に居る  
 友の動作を見ては真似つつ  
 兵隊の影も見ざりし此の町に  
 日系兵の軍装いりし（4巻 206）

部隊に入った2世の作品が載せられている事は大変珍しいことである。他の作品と比べて全く違った視点で作られた作品である。更に、1943年8月18日の川柳には次のように別離に関するものが多く見られる。

出所する子等それぞれ希望抱き  
 人目無くだき合ふ姉妹停車場  
 抱かれない母を求めて泣き続け（4巻 222）

学業のため出所するもの、又、転住されるものなど、それぞれ複雑な立場の別れを言葉にした作品である。1943年9月20日『北米短歌』では、1世の部と2世の部が並んで掲載されている。

日本人なれば戦時の亜米利加に 招き迎へむ  
 州とても無し 一世 松本吉太  
 マンザナの若葉の蔭にそこばくの 希望を持ち  
 ちて我はバス待つ 二世 淵田栄（4巻  
 278）

この二編は、それぞれの作品の中の一編にすぎないが、読まれた内容に注目したい。一世は、この作品でもわかるように、暗く自らの立場を悲観しているものが多いのである。

一方、二世の作品は、このような立場でも、これからの道に希望を抱いている。この対照的な生き方が、その後の一世、二世の生き方に反映されていく。そんな一世の気持ちを、もっと具体的に表している作品が、9月22日の「詩」の中で表現されている。

くらし 仁熊 鳥城

いつとはなしに めっきりと 年を取った  
 うれしい事も無くなり かなしい事もなくなっ  
 た

それにしても 毎日毎日  
 メスの鐘を聞き ラインアップして  
 平和まで 生きようとするには  
 かくも悲しい思いをせねば  
 ならぬであろうか  
 あ！あ！

収容されて 働かずに 三度三度  
 飯を喰わしてもら  
 体は目に見へて 横着になって行くようだ  
 収容所だから 起きて喰って寝る  
 これが我々の生活だろうか

マンザナ収容所にて（4巻 282）

この詩には収容されている全ての日系人が心に思っていることを、勇気を持って表現した本音が語られていると考えられる。今までの新聞紙面には、ここまで自分の気持ちをはっきり表現したものは無い。やっと、そこまで、自分を表現できる時がやってきたのであろう。

そして、9月27日にはやっと、軍隊に入る家族への作品が現れる。

出征した夫にすまぬソーダ見ず 市川静子  
 明日は発つ名残りに妻の国料理 三藤愛仰  
 軍服の二人へ母の瞳はうるみ 神津白子

（4巻 290）

第4巻は、第3巻に比べて文芸の紙面が減り、連続小説の数も減っている。再転住を余儀なくされたり、2世の入隊、忠誠心に対する明暗をわけた選択など、彼らを取り巻く環境の変化の大きさが、復刻版の中にも明白に現れていると考えられる。

#### 4. 第5巻 1943年12月17日～1944年8月18日の作品について

日本での戦況は不利になり、日米の力の差がはっきりとしてきた。紙面でも日本の戦況が掲載される中、アメリカ本土では転住所から出て、再定住が勧められていくようになる。しかし、日系人は、排日を恐れ、なかなか収容所を出て行く事は進まなかった。

1943年7月に不忠誠であると認められた者が隔離される事になって以来、15000人以上がトゥールレイク転住所に移動させられた。

自ら不忠誠を宣言したとはいえ、日系人の心の中には、今後の自分たちの扱いに対しての不安が増していた。そこで、収容所のなかでは、日本への愛国心を強く表明し、2世の中には市民権を放棄しようと言うものもいた。又、1世の中には、市民権を息子に放棄させ、兵役を免れさせ、日本に戻そうという動きもあった。

一方、忠誠を誓った1世に対して、米国が市民権を与えないことに対して、連邦議会で注目されているという動きも1944年1月にはみられるようになっていた。（1月26日の記事より）

1944年7月1日「国籍剥奪法」がアメリカ連邦議会下院を通過した。これは、アメリカ合衆国がアメリカの利益に反しない限り、国籍放棄をできるという内容であり、国内が戦

争状態である場合に限られている。そして、この法律によって、日本国皇帝に忠誠を誓う日系人が市民権を放棄して更に日本に戻ることもより可能になったわけである。

このような2世と対照的に忠誠を誓って志願兵となった日系2世の部隊、442部隊は1944年初めから10月までイタリアやフランスで苦しい戦いをした。ここは、特に激しい戦場で、多くの犠牲を出したが、勇敢に戦う2世の姿がアメリカで社会で認められるきっかけにもなったのである。

しかし、このように2世が活躍すればするほど、何故自分たちは収容所に入れられなければならないのか…。という不満が2世の中に広がっていった。2世の中からは、

- ・2世兵士と他の米人と隔離しないこと
- ・2世はいかなる兵科にも採用されること
- ・日系人を元の居住地に帰還させること
- ・日系人に対する悪宣伝を政府で取り締まること

という請願書が大統領に出された。2世たちが、兵士になって出征するとき、自分たちの家族を守るため、命をかけて、差別と戦い平等を得るため、出征したことがよく分かる。第5巻の目次を見ると、やはり小説は「女の一生」のみである。一方、エッセーは、4巻に比べると、はるかに多くの紙面を飾っている。日系人の心の中には、自分の思いを、俳句、短歌、話で表現するよりも、ストレートに表現されたエッセーに向かう傾向があるということであろうか。第5巻では、この点に注目してみたい。1943年12月22日の短歌には、注目される作品がある。

汝れわが子母国に命ささげよと励まし言ひて  
心満ち足らず（5巻 18）

更に、12月27日のテーマ「自尊心」の俳句

の中では、日系人の自尊心が様々な形で表現されている。

民族の誇りを秘めて待つ平和  
一ト筋の路を行き貫く自尊心  
境遇に負けてはならぬ血の誇り（5巻 26）

このように、「日本人」としての民族、血筋を貫く人たちの作品が目立っている。1943年12月29日にも、同じテーマの作品がいくつか載せられている。

あれでこそ大和男子の自尊心  
民族の誇り貧富にこだはらず  
自尊心抱いて確かな日本人（5巻 30）

日本人であることをはっきり言葉にした作品は、第4巻までに見られない。収容所の中で、日本人として生きる決意をした日系人が意志を表した証拠であろう。もう一つ、注目したい記事がある。これは、短歌でも俳句でもないが、1949年1月1日の紙面に、サルの絵とともに添えられた文には本当に深い思いが込められている。

猿君いわく  
人間は案外間抜けだよ。俺に毛を三本くれたら、世界を平和にするくらいのことはお茶のこさいさいのさいだ。（5巻 39）

この文は、日系人に対する不当な扱いに対する間接的な米国に対する不満が表現されているということだろう。この間、紙面では2世の特別部隊への歳入や、東京での戦火の様子が伝えられ、明るい記事はほとんど見られなくなる。

1944年2月21日

国のため命捧げしますらをの魂しのびつつ春  
を迎ふる  
一生をば歌にしるしてわが子らに残しわかむ  
とけふも筆執る（5巻 118）

この作品の中で、特に2つ目の作品を注目したい。自分たちの心の中を記録して、子供に伝えたいという作者の思いは、作者の移民としての苦しい人生を記録に残し、後世に伝えたいというあらわれとも考えられるからだ。

1944年3月13日には、シカゴ方面に日系人5000名が定住した記事が出ている。収容所に残るものと新天地に移る者によって収容所にはあわたましい日々が続いていた。

1944年4月17日の詩の中に、珍しくストレートな表現の詩が見られる。

明日の日 橋本 京時

あこがれたアメリカ生活  
全ては… 何もかも…  
遠い過去に走り行く  
寂として心のままに  
忍び寄り哀愁の吐息のみ  
余りにもだだっ広い

空間に  
無意味に広がって消える  
つまらない…  
気まぐれな奴らの暴挙に絶えず緊張し  
警戒せねばならないとは

映画で見るときの様に  
紳士的でなく  
謙遜でもないじゃないか  
あこがれたアメリカの生活

親の愛情の手から  
小鳥の様に飛び出して来たアメリカ…  
そして5年もの月日の流れたアメリカ…  
絶望だ  
しかし、その意気消沈した私の頭には  
『明日』と言う言葉がある  
人生の生甲斐を感じさせる『明日』と言ふ日  
が…  
私は祖先の歩みと共に往こう（5巻 214）

この詩は、自分を励まし、絶望と戦っていく姿を素直に表現している。

俳句や短歌は、第1巻から第4巻までと同様、自然をテーマにした、ささやかな夢や希望を現した作品が多く見られるが、詩の形態では、自由な形で表現できることもあり、自ら選んだ移民という路を後悔し、絶望し、しかしあきらめきれず、新しい路への夢を追い求めようとする。そんな日系移民の姿がうかがわれる。

英文版には、多くの2世の兵隊姿の写真とともに戦地の中での活躍が伝えられる中、俳句や詩などの世界では、日本人そのものの人々が日本語の作品を書いていることが、その後の日系1世が、同化できず、悲惨な一生で終わる一面を語っているかもしれない。

## 5. 第6巻1944年8月21日～1945年4月23日の作品について

この第6巻の中で注目したい作品は、出征する子供に対する思いを表現した作品と、戦死した息子への思いを表現した作品である。

伊太利の消印を瞳に父母黙り（6巻 20）

という8月25日の白舟の作品と

胸のせまるを笑顔に包み、我子送るも国の義理西東西 9月22日（6巻 68）

が載せられる一方

軍服の君がうつしへ香煙の中に笑ますも生ける如く（堀内和歌子10月16日）（6巻 108）

敵で死ぬ我が子の骨の埋め所（平田紀鳥 9月25日）（6巻 72）

忠誠は遺骨となって認められ（山中白鳥 12月15日）（6巻 212）

という作品で、親にとっては敵国でしかない米国に忠誠を尽くし、命を落とした息子への悲しみを表現したものもある。このように戦死すると、母親は収容所で表彰されるのである。こんな皮肉な運命を詩や散文にすることは、生々しすぎるのか、ほとんどみられないのである。

更に、2月14日から23日に慰霊の俳句特集も組まれている。

さて、戦争も終盤になり、収容所の一世達は、元の生活に戻る日が近づいている。先に収容所を出た人々の様々が記事になり、それを目にすると、排日の風は相変わらず強い。アメリカに忠誠を誓えば、収容所を出され、そのため、敵国外国人として焼き討ち事件なども起きる。

親心迷ふ出所の西東 春子2月28日（6巻 336）

去る者か送るが幸か棚一重 白雀11月15日（6巻 160）

めくる暦に名残は深い 明日はいつこで暮らすやら 3月24日（6巻 378）

このように、せっかく日本語が通じるコミュニティを出て、日本語を使えない異郷の地に住む事に、なかなか決断を出来ないでいる。

第6巻は、第5巻に比べると、俳句や短歌が多く載せられている。それは、いかに、日系人社会で訴えるべき問題が起きているかということであろう。息子を失った両親の悲しみ、そしてやっと慣れてきた収容所というコミュニティの解散。人々は不安と悲しみが入り混じり、筆を取り、心の迷いをお互いに語らずに入られなかったのだと考える。

又、第5巻同様に文芸作品は、前半「女の一生」後半「半七捕物帳」しかみられない。文芸作品を書いて、紙面に出ることを望む人々が少なくなっていたからであろう。

さて、第6巻の中で最後に注目したいのは4月4日の1つの記事である。

お願い

かねてユタ紙上を通じてつぎつぎと発表いたした日系戦残勇士の追悼句を『慰霊』という小冊にまとめ、今期対戦の記念となすべくそれが準備を進めております。(6巻 396)

こうして『慰霊』という一冊の本での作品が発表されることになった。

## 6. 第7巻 1945年4月25日～12月28日の作品について

この時期は収容所の閉鎖、日本の敗戦という、日系1世にとっては辛い出来事ばかりが続く。日本の敗戦が信じられない日系人のコミュニティでは、「敗戦」はデマだと信じる者も多かった、とはいえ、米国に忠誠を誓わなかった日系人達に対して「帰国」を要請する動きが強まり、感傷に浸ってばかりでは

いられない事態になっていた。自ら帰国する者、強制的に帰国させられた者、又、忠誠を誓わなかったのは収容所に入れられた異常事態だった為という理由で、撤回を主張する者等様々であった。

さらに、終戦により、いよいよ収容所は完全に閉鎖されることになり、排日を恐れながら出所を強要される不安は高まるばかりであった。外国人土地法違反で、日本の土地を没収する決定もされ、いくつか実行されたがJACLの活動により、フレッド・オオヤマ土地没収事件は連邦最高裁判所で1948年に逆転勝利をすることになる。

『ユタ日報』は、1945年12月28日で終わっているが、第7巻では帰国の問題、収容所を出る前後の心の動き、さらに新しい人生のスタートへの思いを中心に、作品を研究していきたい。

5月18日の作品には次のようなものが見られる。

帰り行く日のありやなしと思いて  
加州の我が家に今かも往なむ  
別れ行く日の近づけばしかすがに  
名残惜しみて布にものいふ (7巻 50)

この短歌は、収容所を出る日系人の不安な心を伝えた作品である、さらに6月1日には、人々の会話を察する俳句も見られる。

出る出ない声に所内の黄昏る (7巻 74)

6月4日にも同じような心のうちを表す作品が見られる

三年を和やかにして又別れ (7巻 78)

強制的に、今まで築きあげた、土地、財産、さらにはコミュニティーと和も奪われ、やっと新しいつながり築き上げた日系人達であったが、強い排日の風の中、再びカリフォルニアの元の場所に戻る勇氣は、なかなか持てない人が多かった。そうなれば、これからは個々でその排日を恐れながらひっそりと生きていくしかない。実際、終戦後、日系人はできるだけ日系コミュニティーを作ることを避け、人目を避けて生活している。

さて、もう1つのテーマ、終戦に対する作品に目を向けたい。

8月20日の『時事』というテーマの話に注目したい。

余韻まだ醒めないところへ今日ある日  
街頭の乱舞心にふれるもの  
口実を設けて仕事を止めてくる  
号外をつかんだままで男泣き  
兄弟みんな泣いている泣いている  
泣いた事ない親分も泣いている  
今に見よ悪ばかりの世でないぞ  
血と汗の行進曲だ今日からは  
敗戦にくじけて済まぬ血の流れ  
今日の日を大御心にふれて見る

（第7巻，210）

米国に移住しても、たとえ表面的には、米国に忠誠を誓っても両親や親類の住む日本、一番心に支えにしてきた国が自分達を苦しめる米国に負けたというショックはあまりにも大きいことだろう。今まで泣いた事のない親分が泣く程、悲しい出来事であることがよくわかる作品である。

その後の紙面には、原爆の研究の記事、日本の天皇の動向などが、詳しく述べられた記

事が多く見られる。しかし、短歌や俳句の中には、それに関するものは、あまり見られない。やはり詩の形態で、時々表現されている。

さらに「サイレン」という作品が掲載されているが、この短編小説の中では、二世や一世の日米アメリカ人が「日本降伏」についてラジオで聞いた時のことを題材にしている。自分達の気持ちを、日系二世と一世の親子の会話という形で一世の驚き、悲しみ、日本を守りたい気持ちと、客観的に2国を見ている二世の娘の気持ちを表現しているのである。

第7巻には、このように短編小説や、「緑の春」（中村武羅夫作）という小説も再び見られるようになり、少しずつ人々が普通の生活に戻ってく様子を感じられる。12月の紙面には数々のお店の開店案内が出ている。このように日系人達は収容所を出て、恐る恐るながら、新しい生活に戻っていったのであろう。

### おわりに

本研究は、日系アメリカ文学の歴史と、その内容を初期の移民から三世の作品に至るまで研究しようとする一部である。特に『ユタ日報』という紙面の中での文芸作品を追ってきたので、日本語の作品ばかりである。しかし、日系一世が自分の気持ちを言葉にするには、この方法しかなかったのである。そして、この時期を境に、彼らが自分達の気持ちを表現する事がなくなった事に注目したい。一世の俳句、短歌、詩で彼らの真の心の叫びが、その後の日系文学の中心になっていると考えたからだ。

彼らの本当の苦しみ、悲しみが二世、三世の目に触れ、その後の作品が生み出されたことは確実である。今後は、これらの作品がど

のようにその後の作品に反映されていくか研究していきたい。

#### 注

- 1) この内容については、愛知学院紀要第32号で詳しく述べている
- 2) ユタ日報の中の作品の出典について文中で何巻何ページかを記載(例○巻 56)

#### Works Cited

1. 上坂冬子, ユタ日報のおばあちゃん, 寺澤国子, 瑞雲舎, 2004, 東京。
2. 上坂冬子, Ijyu, Who's Who 地平線の群像語り継ぐ破天荒人生—おばあちゃんの「ユタ日報」
3. 田村紀夫, 『復刻「ユタ日報」』, さつき書房, 2004, 長野。
4. 中川六平, 日本人が書いた本の中のアメリカ—『おばあちゃんのユタ日報』, 理想の科学, 東京。

#### Works Consulted

1. 小野由雄, アメリカにおける日本語新聞の役割(2) 太平洋戦争期の『ユタ日報』の場合, 愛知淑徳大学現代社会学部論集9, 愛知淑徳大学, 2004.
2. 川口博久, 日系人への人種差別と日系新聞の対応—『ユタ日報』(1941年1月11日~1942年3月30日)を資料として, 民族の対立と調和—東アジアとアメリカ(アジア研究シリーズNo.40), 亜細亜大学アジア研究, 2001.
3. 東元春夫, 『ユタ日報』と第2次世界大戦—社会的考察—, 現代社会研究6, 京都女子大社会学部, 2004.
4. エイボン女性大賞が決まった「ユタ日報」のリマークブルばあちゃん(グラビア・people), 文芸春秋65(14), 1987, 11.